

源氏物語をどう読むか

本居宣長の『源氏物語 玉の小櫛』の総説二のなかに次のような文章がある。「己れ教え子どものために、早くより、この物語を読み解きて聞かすること、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、説くに倦む心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれど、いささか倦む心出で来ず、たびごとに、初めて読みたらむ心地して、めづらしくをかくのみおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどは知られて、かへすがへすめでたくなん。」この文章に同感であるのは私ばかりではなからう。私と『源氏物語』とのつきあいは半世紀にも及ぶけれど、何度読み返しても、つねに新しい読みのもたらされるのが『源氏物語』であった。それにつけても思い出されるのは池田亀鑑先生の書かれた『源氏物語の構成と技法』（『源氏物語研究』昭和四十五年 有精堂）という論文の末尾に書かれている次の文章である。「源氏物語はあまりにも神秘にして幽邃な森である。この森はどのような声にも反響する。どのような解釈もどのような批評も黙々として受けるであろうが、しかしそれは必ずしもこの

秋 山 虔

森の真意とは言えない。それらは多くは解釈者自らの解釈であり、評者自らの批評に過ぎぬ。人々はこの森において自らの心のエコーを耳にしているに過ぎない。それだけにこの森に立ち向かう我々の心は謙虚に、そして真剣でなければならぬ。」いかにも『源氏物語』はどのような問いかけにも応じてくれる。どんなふうにも読める、ということとは現在のいわば源氏ブーム現象からも合点されるいうものである。『源氏』を論じ『源氏』を批評し『源氏』を享受する人々は、そのことによつて自身を語り、確かめるということなのだろう。それが時代時代を突き抜けて減じることのなかった古典のいのちの証しというものかもしれない。いったい『源氏物語』の成立の時代から現代まで千年の間、『源氏』がどのように読まれてきたかを顧みるならば、時代時代の『源氏物語』はそれぞれの読みによつてそれぞれの形姿を呈していた。いわば『源氏』の研究史・享受史はそれがそのまま日本人の精神史の一翼を担っていたのである。今日の大衆化したともいうべき『源氏』への関心——その理由についてはここでは深く立

ち入ることはしないが、それも現代の文化状況の表れというべきだろう。

現在、『源氏物語』はたいへん読みやすく作られているテキストが出揃っている。かつては須磨源氏といういいかたもあったように、とても原文で全体を読みとおすことなど国文学者の間にも指折り数えるほかになかっただろうといわれているが、現在は詳しい頭注や傍注、あるいは逐語訳付きのテキストが作られているから通読も容易である。なじみやすい現代語訳や縮約書、模倣書、それから翻案というべきか『源氏』にもとづく創作は推理小説をも含めると数知らず、また漫画化された『源氏』も幾種類か数えられるのだから、『源氏物語』は難解な現代小説よりもよほど身近な存在であるといえるかもしれない。しかしながら、このような大衆化を一概に喜んではばかりもいられないのは、『源氏物語』に限らず古典というものはそう簡単になじみうるものではなく、立ち向かうためにはそれなりの修練を抜きにしてその真価に参入できるものではないからである。

第一に、自明のことながら『源氏物語』は『源氏』の時代のことばで書かれている。そうした古い時代のことばの内容、語感というものが現代の言葉に置き換えられるものだろうか。最近はずぐれた古語辞典が簇出しており懇切丁寧な解説を読むことができる。例えば『岩波古語辞典』によって「いとほし」という語の説明を見ると△弱い者、劣った者を見て、辛く目をそむけたい気持ちになるのが原義。自分のことについては、困ると思う意。相手に対しては「気の毒」から「かわいそう」の気持ちに変わり、さ

らに「かわいい」と思う心を表すに至る▽とある。「こころぐるし」を見ると△相手の様子を見て、自分の心も狂いそうに痛むのが原義。類義語イトホシは、相手の状況を見かねて、目をそらしたい気持ち、自分の身については、困ってしまう気持ち、ラウタシは、か弱い相手をかばってやりたい気持ちという▽とある。ここで類義語として触れられている「らうたし」の項を見ると△ラウ(勞)イタシ(痛)の約。弱いもの、劣ったものをいたわってやりたいと思う気持ち。類義語イトホシは、無力なものを見るのがつらく、眼をそむけたいの意。ウツクシは、小さいもの、幼いものが好ましく可愛い意▽とある。ここに触れられている「うつくし」がどのように説かれているかは省略に従いたい、このようにその語感が詳しく説明されているものの、それらの語に相應する現代語は何かということになるとたと困却せざるをえないのである。限りなくそれに近い語を選ぶことができて、やはり古語の多義的なふくらみは失せて一義的に瘦せてしまうのをいかんともしがたいのである。例えばまた、学校文法で過去を表す助動詞とされる「き」「けり」や完了の「つ」「ぬ」「たり」「り」など、こうしたいわゆる辞がかつてははっきり使い分けられていた、それらを現代語訳に生かすことができない。ということは源氏物語の時代の人々と現代の私たちは心と心を重ね合わせることが容易ではないということであろう。文章法においてもそのことはいえるだろう。具体的な論及は省略させていただくことにして、ここではまず、かつて正宗白鳥によって書かれた批評を紹介することにした。『……源氏物語を読んで、だらだらした締まりのない

文章にウンザリした。いくら千年前に世に現れた古典であるにしても、同じ国に生まれて、少年時代から多少は古文を学んで来た私が、日本最大の傑作と折紙のついたこの物語に嫌悪を感じるのには不思議である。しかし、事実には於いてこんなに読みづらいものに接したことはなかった。内容は兎に角無類の悪文である。」といい、しかしアーサー・ウェレーの英訳『The Tale of Genji』の文章を絶賛して「死せるが如き原作を活返らせることもあるものだと、私は感じた。」と述べている。正宗の『源氏物語』悪文説はけっして彼のみの奇矯な意見ではなかった。すでに内村鑑三・斎藤緑雨・高山樗牛といった明治の論客によって『源氏物語』はきびしく貶されていたし、後には和辻哲郎によって『源氏』の文章が難解なのは自分の語学力が乏しいからではなく『源氏』の文章の欠陥によるものと評されていたことも忘れがたい。しかしながら、そうした『源氏』の文章のなじみがたさについて、かえってこれを評価する竹西寛子の次のような文章を紹介しておきたいのである。「一見曖昧で、不明瞭な『源氏物語』の文体だが、それが作者の標準であり、ゆるやかなリズムで築き上げられた言葉の宇宙に一度閉じ込められてしまうと、一つ一つの言葉がいかにも確かな、ゆるぎないものとしての場を占め、意味をもってくることに気づかせられる。細部に表情が与えられるのも、こうした文体によってのことなのである。急いで結論を出す必要のある文章、読者の感受性にでなく、観念に直接訴えなければならぬ文章、論理の組み立ての厳正さを、かけがえないものとする文章、推定せず、断定しつづけなければならない文章の場合、こうした

文体はまず不向きだといえよう。しかし、読者の観念に直接訴えるよりも、感受性に訴えることが先決であり、作者の感受性を充分表現するためにおびただし数の生と死の交錯を必要とする長篇、膨大な空間と時間を必要とするこの『源氏物語』には、まことにふさわしい文体だったということが出来る。」(『源氏物語論』昭和四十二年 筑摩書房)『源氏物語』の文章について具体例に即しつつ分析し論評することのできる場ではないので、褒貶相反する正宗白鳥、竹西寛子の文言を紹介することで、先に進ませていただくことにしたい。

以上は、じつは前置きであって、『源氏物語』の世界そのものの取っ付きにくさというか、むしろそう簡単に取っ付いてしまっただけにすぎないような問題についてまず述べていきたい。いったい、物語の主人公光源氏への共感しがたさということがこれまで多くの人々によって指摘されてきた。光源氏という主人公には現実性がない、地上の人間とは考えがたい、ということがずいぶん言われてきている。いかにも、こんな人がこの世に生まれてきていいものかといった驚きに迎えられて彼は物語の世界に登場してきたのだ。仇敵といえども相好を崩さずにはいらぬ美貌・学芸・技能の万般にわたる超一流の能力、底知れぬ情愛の持主であると同時に卓越した政治家であり人心収攬の能力も抜群である、といった光源氏のような人物はいかにも現実には存在しえなからう。彼は一世源氏として物語の世界に敷設された政界を歩み、やがて後に天皇家と緊密な身内関係を取り結ぶ摂関家的存在として末長かるべき榮華を手中におさめるのだが、じつはそうした経路

は、当時の賜姓源氏にはまったくありえないのであり、その点でも現実性に悖るといえよう。

和辻哲郎の名著であり岩波文庫の一冊でもある『日本精神史研究』におさめられている「源氏物語について」という論文には「もし現在のままの源氏物語を一つの全体として鑑賞せよと言われるならば、自分はこれを傑作と呼ぶに躊躇する」と述べられ、また「光源氏は一つの人格として描かれていない。その心理の動き方は何の連絡も必然性もない荒唐無稽なものである」とも評されている。和辻の考えでは、現在の形の源氏物語以前に好色人光源氏を主人公とする伝説あるいは物語がすでに盛行していたのであろう、そうしたいわば『源氏物語』を前提として重ね写真が作られるように紫式部によって書き継がれていつて現存のような『源氏物語』になった、そのように推定することによって光源氏の人格としての不統一性も合点されるというのだが、このような和辻説は現在もなお決着がついていない源氏物語の成立過程についての論議の糸口をなしたものである。しかしながら私は、その成立過程がどうであろうとも、作者は現在のような形の『源氏物語』を仕上げることによって光源氏像を完結させたのだし、当時の読者はもとより現在に至るまでの読者も、このような形での『源氏物語』を読むことによって光源氏のイメージを作りあげてきたのである。むしろ私たちは近現代的な目で見たときの不統一性を、そこにこそ古代物語の主人公のそれこそがみごとな在り様なのだという視点を設けるべきであらう。といった古代物語の主人公は、その物語が成立した時点において

も日常的な現実の尺度の通用しない存在であつたといえよう。ごく普通の人間と等身大の日常的な存在であつたら、これを後々に語り伝えていく必要もないわけである。容易に共感しがたく、異常であり、これはいったい何者なのかと関心を寄せざるをえない、ということとで物語は伝承されていくのだといえよう。『源氏物語』も例外ではないのであつて、光源氏にとあらゆる美質が超現実的に賦与されているということは、そうした物語の伝統的な約定に従うことによって、そのような人間像が仕上げられたということであらう。そういう主人公について不統一であり一人格ではありえぬといった批評は筋違いでもあるといえよう。和辻は、光源氏の女性遍歴について次のように論評している。「何びとも認めるごとく、この物語に現れる主要な女の多くは、愛人の独占を欲するものである。そこから彼らの苦しみが生ずる。いかにも多妻が公認せられた時代でも、恋に内在する独占の要求は如何ともしがたい。したがって、主人公の源氏は恋人の各々に対して独占の要求に応じる態度をとらなくてはいけない。しかも作者はこの主人公を口先だけの優しい女たらしとしてではなく、真心から恋する男として描こうとする。したがって恋人の数を増やすとともに主人公の描写は困難の度を加える。現在の源氏物語はこの困難に押しつぶされている。」以上の文章に続いて、前引の「源氏は一つの人格として描かれていない」という文言が続くのだが、はたして光源氏は「この困難に押しつぶされている」のだろうか。やはり近現代的な目と心を引込めて、『源氏物語』の向こう側にまわってみたらいかがであらう。光源氏の前身ともいえるべき『伊

『伊勢物語』の主人公「昔男」の在り様に注意したいのである。『伊勢物語』は流布本で百二十五段、その大半は男女の關係が語られているが、もし仮に各段相互に関わり合いながら連続していく世界としてこれを読んでいったら、あの主人公はまったく支離滅裂というほかあるまい。ところが『伊勢物語』は各段とも「昔、男：」「昔男ありけり」などと起こされていて、互いに話が独立している。話が断絶した關係で連続しているのであり、従つて「昔男」は多様な相手と関わりつつも、それぞれが一回の全身的である。そうした話の主人公の総和として鮮烈な人間像が仕上がつているのだといえよう。この主人公の女性關係に實際の男女關係を讀むべきではない。むしろ時世に背を向け世俗の掟から己れ自身を疎外し、自由な精神の領域を拓いていこうとする、そうした生きかたが和歌という非日常的言語による人間交流によつて証し立てられていく。これが歌物語といわれる『伊勢物語』の急所であるといえようが、光源氏をそのような伊勢の主人公の直系の蘇りとして促えるとき、彼が一つの人格であるかないかといった近現代的な議論は無意味であることはいうまでもなからう。光源氏のある事件ある場面における姿、行為はそこにおいてそうあるほかないといった人情の眞実——本居宣長の説く「もののあはれ」というものだろうが、それがかたどられているといえよう。

しかしながら『源氏物語』と『伊勢物語』と、両者の差異はこれまた歴然としている。伊勢の主人公昔男は、ここで具体的に論ずる余裕はないけれども脱社会的脱政治的に単純明快であるのに対して光源氏のほうはどこまでも宮廷政治の眞つ只中に羽交ひ締

めに締めあげられる人生を余儀なくされているのであり、そうであることと格闘しながら独自の道を拓いていくのである。いった彼の人生の開始の語られる桐壺巻にその母のいわば横死に至る経緯が縷々と語られていることに注意したい。ある帝の後宮で、桐壺更衣がその身分からすれば常則に反する形で帝寵を独占したために却つて苦境に陥り死に追込まれていったということは後宮世界が単に帝の私的世界ではなく、そこに権勢を競いあう上層貴族たちの切実な願望が注ぎ込まれる坩堝であつたからである。桐壺更衣がその父大納言の死去の後に、父の遺言に従つて入内したということは、後見の欠如する決定的な不利をも凌ごうとする強烈な家門の願望ゆえであらう。いかにも、その願望の応えられる事態は將來されることになつたのだが、しかしながらそうした書かれた時代・社会の現実であらうとも許容されるものではないのであつたのである。もし仮に帝と桐壺更衣との仲らうが願望どおりにうるわしく完結するものであつたら、それは現実感の希薄な絵空ごとになることになるだろう。更衣の死に至る経緯の語られることによつて物語の世界の現実感獲得されることになるが、このような帝と更衣との死に向かつて遂げられた愛のかたみとして誕生してきた第二皇子光源氏の前に、やはり母を死に追い込んだ現実の壁が立ちはだかつているのは当然であらう。彼が前記したように万般の超人間的な資質の持主であるといふことは、古代物語の主人公としてそれが約束ごとであつたといえ、そうした資質、能力あつてこそ彼は世俗の圧迫をはねのけて生きることが

できたのだといえよう。

帝はこのすぐれた皇子を後嗣にしたいと願ったが、しかしその願望だけにとどまったのは余儀ないことであつた。右大臣の娘、弘徽殿女御腹の第一皇子（朱雀院）をさしおいて後見のないこの第二皇子の立坊など世論の許すはずがないのである。彼は臣籍に降下して源姓を賜ることになるが、帝のそのような処置は皇位繼承を保留する親王身分の危うさが懸念されたからである。古来、皇位繼承権のあるすぐれた皇子たちが抹殺されていった例が想起される。

光源氏は十二歳の年に元服し、左大臣の娘葵上と結婚する、というより帝と左大臣との談合によつて結婚させられたといふべきだろう。葵上の母は帝の妹宮であるから、源氏と葵上はいとこ関係にあり、互いに身分素性は申し分なく相応である。源氏は左大臣家という権門の支援によつて地位は安定し、左大臣家としても帝との身内関係を強化することによつて、第一皇子の後見である右大臣家の権勢を凌ぐことになったという。光源氏は自身の意思願望などとは関わりなく官廷政治の機構のなかに取り押さえられているといえよう。葵上との夫婦仲には心の交流が最初から断たれており、源氏は父帝や左大臣への義理だてから葵上のもとへ通うほかないが、じつはそうした彼の心を占めているのは、亡母に代つて帝の最愛の妃となつてゐる藤壺の宮への切実な慕情であつた。いったい藤壺に対する源氏の恋情はきわめて自然な人情の行き着くところであり、やがて二人は密通して冷泉院をもうけることになるが、しかし藤壺が父帝の妃であるからには、それが絶対

にあつてはならぬ所業であることはいふまでもない。考えてみれば、帝の反秩序的な愛のかたみとして生を受けた源氏は、この父帝の情熱を父帝への恐るべき裏切りという形で受け継いだことになるが、この罪過は絶対に隠蔽されねばならない。ことに藤壺の細心の分別から二人は二度と交わる機会を持つことができない。光源氏の女性遍歴には藤壺に対して激しく慕つていくもののけつして癒されることのない渴望が底流しているといえよう。光源氏は伊勢物語の昔男の蘇りであると前記したが、しかしながら昔男とのちがいは、複雑な諸状況を余儀なく背負い込んで、それとの格闘において生きていく点にある。いわば昔男を断然引きはなす形で、源氏は昔男を引き継いでいるといえよう。

光源氏と藤壺との間にもうけた、表向きは父帝の皇子冷泉院は東宮となり、やがては帝の位につく。その後見として重んじられる源氏は、冷泉帝の母后、衆望をあつめる女院となつてゐる藤壺と深慮遠謀を交わして、まさに卓越した政治家としての能力を発揮し、強固な体制を確立することになった。彼は藤壺と共有した秘事によつて異数の榮華を手中におさめたのだが、しかしながらその榮華を誇らかに享受できないばかりか、そのことへの恐れから免れなかつたといえよう。その土台が藤壺と共犯した罪にほかならなかつたからである。

源氏は三十二歳の年に藤壺に先立たれ、その後冷泉院から自分が帝の実父であることを知られてしまふ。帝は、実父を臣下として仕えさせる背理を憂慮して讓位の意向を洩らされるけれど、源氏は固辞し、結局は准太上天皇の地位におさまることになった。

六条院と称される四町を占めた大邸宅は四季の町をもって構成され、季節の循環の秩序を空間化して、天皇も追従しえぬ地上の極楽というべきであつた。しかしながら、こうした体制を作り上げた源氏は、その体制が無類であればあるほどこれを保持していく辛勞に堪えなければならぬのである。彼自身がこの世界の秩序を維持するための掟に苦しく縄縛されることをいかんともしがたい。しかも時代は推し移つて、源氏の庇護下に育成された次世代がやがてそれぞれの生き方を主張して物語の世界で主役を演ずるようになると、源氏はもはや自身を中心となつて世界を拓く主人公ではなくるのである。三部作として読み取ることが定説といつてよい源氏物語の第一部は、第三十三帖藤裏葉巻における冷泉帝・朱雀院うち揃つての六条院行幸という盛儀をもつて終結するが、第三十四帖若菜上巻にはじまる第二部以降の光源氏の在り様の顕著な変貌は無慚というべきではなからうか。

もっとも、源氏の世俗的な繁栄は以前にまさつて確固たるものがあるだろう。藤裏葉巻において源氏は唯一の娘——かつて朱雀帝の時代に源氏は都から退去して須磨・明石の地に流離を余儀なくされたが、明石において播磨前司入道の娘（明石の君）と契り、その腹に娘（明石の姫君）をもうけていた——を東宮に入内させたが、若菜上巻において明石の姫君の腹に東宮の一の御子が生まれた。この御子は東宮が帝位に上がったときには東宮になり、やがては帝になるであらう。源氏一門の繁栄は幾久しく約束されることになった。しかしながら、そのような慶びにもかかわらず六条院世界は源氏の本意に反していかんともしがたい矛盾を抱えこ

むことになる。

いったい光源氏はこれまでの長い歲月、藤壺の宮の形代としてその姫にあたる紫の上を迎え入れ、理想的な北の方として重んじ、苦楽を分かちあう人生を歩んできたのだつた。六条院の秩序も光源氏と紫の上の信愛を基軸として保たれていたといえよう。明石の君所生の姫君を東宮に入内させることができたのも紫の上が手許に引き取つて申し分のない后がねとして養育したからである。

ところが、そのような紫の上と源氏との、それまでは絶対的と思われた関係がひび割れてくることになった。朱雀院上皇の女三の宮が六条院に迎え入れられることになったからである。そうした事態が源氏の関知しないところで、そうなるよりほかないといふべく仕組まれていった経緯に注意したいが、ここで具体的に論述することは省かせていただくほかない。女三の宮はあたかも女御として入内するのと同様の大々的な儀式をもつて六条院に輿入れしてきた。

朱雀院最愛の内親王であつた女三の宮は、父院の莫大な資産を相続したので、この女宮を迎えた光源氏の経済力は一段と増したはずである。女三の宮のそうしたはなやぎに対して紫の上が平静でありえぬのは当然であらう。女三の宮の今は亡き母女御は藤壺の宮の妹宮であり、紫の上の父式部卿宮は藤壺の宮の兄であつたから、女三の宮も紫の上も同じく藤壺のゆかりの人ではあるけれど、前者は歴とした内親王であるのに対して後者は式部卿宮の劣り腹の娘だったのである。その身合上の顕著な格差はいかんともしがたい。紫の上は、これまでのほとんど絶対的でさえあつた己

れの地位の揺るがされる事態に絶望するほかないが、さりとてここで取り乱すことはその矜持が許さない。源氏に協力して女三の宮迎え入れを心から歓迎するかのようふるまうのである。その態度がいかにばかり知れぬ痛苦を自抑するものであるかを知る源氏はいまさらながら紫の上に対する執着を深めることになった。

そうした源氏の心の動きは、迎え入れた女三の宮が接してみればいかに張り合いがなく魅力の乏しい女性であるかという実感と表裏するものであった。源氏はいまはあたかも依りすがるようにして紫の上をいたわり、愛の不変を訴え慰めるが、さりとて朱雀院の手前女三の宮の処遇に怠りがあることも許されない。一方を立てれば一方が立たぬ矛盾をその場凌ぎに取り繕うほかない源氏であるが、紫の上はまさに毅然として知恵分別を行使しつつ、これまで最も重んじられてきた立場を崩すことなく守りぬいたのである。

女三の宮の輿入れという事態のほかに紫の上の心を波立たせたのは明石の君という存在であった。前記のように彼女は源氏の流離の時期に源氏と結ばれ、源氏一門の末長い栄華のための切札となった明石の姫君をもうけ、その身分の劣りゆえに姫君の養育を紫の上に委ねるほかなかったとはいえ、姫君が東宮妃として時めき、一の宮をはじめ男女の宮たちの母として重みを増すとき、いかに身の程を自覚した卑下謙遜に徹しようとも、生母としての存在感是否定すべくもないのである。紫の上に源氏の子が恵まれなかったことは一門にとって無念なことであったが、当の紫の上にとってはそのことゆえに明石の君に対するこだわりをうちほらう

ことができないのである。光源氏と共生して六条院の平安のための中枢的存在でありつづけた紫の上は誰からも敬仰されたものの、そうであればあるほど彼女の心内の寂寥はいかんともしがたい。現世を見限る彼女は後生の安養を願って出家を望むのだが、しかしながら彼女への愛着の日増しに募る源氏にとっては、そのことが許容されるはずもないのである。源氏と紫の上と、この世間的には稀有の理想的な夫婦のそれぞれの、けつして通じあうことのない心意の落差はいたましいというほかない。

若菜下巻に語られる女楽の催しは、まさに文字どおり空前絶後の六条院文化の証しであったが、しかしながらそれは落暉の華やぎであったといえよう。紫の上が発病したのはその直後のことであった。彼女が六条院を去って二条院に養生する身となったということは、すなわち六条院世界が崩落の過程に入ったことを意味するだろう。一時息絶えた紫の上は必死の加持祈禱によって蘇生したが、癒えることのなく一進一退する病であり、そのために日夜看病に余念なき源氏が不在の六条院において、女三の宮は、年来彼女に思いを寄せていた柏木に迫られ、余儀なく身をゆるしたのである。女三の宮はみごもり、やがて男子（薫）を生んだ。国宝源氏物語絵巻の柏木の三の画面は、光源氏の姿を前面から描いた唯一のものが、薫の生誕五十日の祝儀の日、頭を垂れ身を屈してわが子ならぬわが子を抱き、ながめ入る源氏は、若き日の藤壺との過ちの現世における応報をかみしめている。源氏は己れの人生の土台であるというべき藤壺と共犯した罪ゆえに来世にどのようなに過酷な報いを受けねばならぬか、そのことを恐れていたと

いうが、しかしながら来世を待たず現世においてこの苦杯を喫することになったのだから、来世の罪は軽減されるのだろうかと思ふ。極上の栄光を生きてきた源氏が凄絶な苦悩を抱え込まれる第二部、若菜上・下巻とそれに継ぐ栢木巻は物語世界の圧巻といえよう。そこに語られる源氏の苦悩について、かつて超人間的存在であった源氏が人間的になったなどと簡単に言つてしまふわけにはいかなのである。准太上天皇という地位にある源氏にとって女三の宮はその身分地位に相應の正室である。彼女は源氏に密事を知られたことを思い悩み薫を生んだ直後に出家するが、源氏が若い尼姿の正室を六条院の春の町に住まわせるということは尋常ならざることである。薫の実の父栢木はこれまで源氏の最も親しく重んじていた側近者であったが、あたかも自死するかのようにして世を去つた。そうした身辺の異常事態もさりながら、源氏自身の苦悩はやはり普通の人間のそれを越えているのであつて、その巨大な深刻さは超人間的な異常びとであることに見合うものだといえよう。物語のなかに源氏自身が己れの人生について口にして語ることばとして、あるいは心中の思惟として省察する文言がある。薄雲巻、若菜下巻、御法巻、幻巻などにそれを読むことができるが、例えば若菜下巻では紫の上に向かつてこう言っている。「自分は幼少から常人とは違う境遇を生きてきて誰しも追隨しえないような栄光を享受してきたけれど、しかし一方では世にまたとなく悲しい経験を重ねた点でも人並はずれていた。かけがえなく大切な人々に次々と先立たれ、とり残された晩年になつても、不本意な悲しみは尽きない。道理に悖るあるまじきこ

とにかかわつたにつけても、どうしてそういうことになつてしまったのかわれないながら納得のゆかぬ苦しみを抱えてどこまでも憂愁に取りつかれた身の上としてこれまで過ごしてきたのだから、そのこととさしかえといふべきか、自分が思つていた以上に、この年まで生きていられるのだろうかと思ひあはれぬ。」以上は光源氏の述懐の意訳だが、なお例えば紫の上の死後の源氏を語る幻巻でも、親しい女房に向かつて言うには「自分は一つ不足のない高い身分に生まれていながら、また一方では誰よりも格別に不運の身であつたという思ひの絶えたことがない。この人生のはかなく憂きものであることを悟らせようとして、仏などがそのようにお決めになられたのだろう。そうした仏のご意向をしいて無視して俗世に生きながらえてきたために、晩年になつて悲痛な結末を経験することになつてしまった。自身の宿運を見果て、器量の限度を見きわめ、それで氣持もらくになつてゐるのだから、今こそ出家へのいささかの妨げもなくなつてゐるのだが、誰彼、こうして紫の上在世のころよりも親しくなつてゐるそなたたちとこれから別れ別れになる段になると、今よりもいっそう心が乱れるに違ひない。なんと頼りないことか、あきらめの悪い根性よ。」と述懐している。これらはけつして場当たり的な述懐ではなからう。『源氏物語』の世界を冒頭の桐壺巻から更めてたどりなおしてみると、まさに右のように統括される主人公であつたことが実感されるだろう。人生の始発において藤壺への慕情を培い、絶対に許されぬ仲らいへと進み、その結果としての異数の栄華を生きた、そのような人生は誰の共感も追隨も許さぬものであつたといえよ

う。

さて、源氏物語の研究に、古来「准拠」という領域が在する。

物語の世界のなかの人物や事件、行事などについて実際の史実や伝承や前例などに当てはめて理解される場合、それらを指して准拠と称したのである。例えば、桐壺巻で高麗の相人が渡日したので帝は光源氏の将来について占つてもらったとあるが、「宇多の帝の御戒め」すなわち『寛平御遺戒』のなかに述べられている外国人に対する扱いについての戒めに従つて、源氏を鴻臚館へ外国の使節を接待する客舎に遣わし、相人に対面させたとある。

『寛平御遺戒』は宇多天皇が譲位するに際して若年の醍醐天皇に与えた訓戒書だが、桐壺帝がこの訓戒に従つたということから帝は醍醐天皇に相当することになる。そうなると帝の皇子である光源氏は誰に相当するのか。古注釈に源高明という人物が指示されてきた。高明という人は醍醐天皇の皇子で臣籍に降つて左大臣にまで昇進したが、いわゆる安和の変（九六九）によつて太宰権師に左遷された。一世源氏にして左遷された人物は後にも先にも高明唯一人である。光源氏が朝廷に対して異心ありとの理由から流謫の生涯に追いやられたのと対応することになる。しかも高明が藤原氏九条流の右大臣師輔の婿であつたために同じ藤原氏の小一条流・小野宮流との対立関係に巻き込まれて失脚したのと同様に、光源氏も左大臣家の婿になつたために左大臣家と対立する右大臣家の謀略によつて流離を余儀なくされたのである。ところが他方、高明の母源周子という人も更衣ではあつたけれども、高明のほかにも多くの皇子女の母となつており、桐壺の更衣のような悲運の人

ではなかつたようである。従つて源高明が光源氏の准拠であるといふことはその事跡に相似し共通するところがあるけれど、いわゆるモデルという意味に解すべきではない。物語のさまざまな場面、諸段階において光源氏は史上のじつに多くの実在人物の事跡を連想させるのである。大津皇子、聖德太子、嵯峨天皇、源融、小野篁、在原業平、菅原道真等々、そして作者紫式部と同時代の人として藤原伊周や同道長が数えられよう。高明だけを光源氏と直結させるのではなく、右のような人々のイメージを源氏の事跡のあれこれに読み取ることができるのである。ことに、須磨明石の流離の後に都に帰還した源氏は摂関政治の立役者のように榮進し、支配体制を確立するが、そうした源氏の姿には紫式部が身近に仕えた道長の面影がおのずから投影することになつたといえよう。作者は、道長によつて領導された摂関政治の時代に至るまでの日本の歴史のなかの著名な、しかも明暗顕著なといつてよい人物たちの事跡や伝承を継ぎあわせ重ねあわせて、それらのイメージの総和ともいふべき光源氏の人生を作りあげたといえよう。紫式部日記によると、『源氏物語』が女房によつて音読されるのを聞いた一条天皇が「この人（紫式部）は日本紀をこそ読みたるべし。まことに才あるべし。」という感想を洩らされたという。学才深い天皇は源氏物語の世界がいかにも伝承や史実によつて裏うちされているかを合点しながら享受されたのであらう。光源氏は、彼自身の述懐にも読まれるように、ことに晩年には凄絶な苦悩を抱え込み、やがて出家への道を歩むことになるが、このような主人公が史実や伝承を重層させて實在感をたたえる世界を生きる巨

大な人間像であるがゆえに、迫力ある現実感をもって私たちに訴えてくるのであろう。

『源氏物語』の第二部の終結、第四十一帖幻巻をもって光源氏は物語の世界から消える。次いで、源氏亡き後の縁者たちの動靜を語る匂兵部卿・紅梅・竹河の三帖を経て物語の世界が新たな主題をもって開始するのは、「その頃、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」と起こされる第四十五帖橋姫巻である。この「古宮」というのは光源氏の弟に当たる八の宮である。かつて朱雀帝の時代、源氏が須磨・明石に流離していたころ、外戚として政界を領導していた右大臣・弘徽殿派によって東宮冷泉院を廃して代わりに八の宮を押し立てようと画策されていたのだが、その謀略は失敗し、源氏帰還の後、冷泉帝の時世になると、八の宮はまったく世間から見放される存在となった。東宮に、そして帝にというコースがありえたかもしれぬ宮であるだけに敗残の意識は並一通りではありえなかつたはずだが、北の方の先立たれ、邸宅が焼亡するという災難に遭つた宮は、現在、宇治川畔の山荘に二人の娘、大君と中の君を養育しつつ仏道に精進の日常である。この八の宮のもとに、柏木と女三の宮の罪の子薫が通いはじめることになった。薫は、己れの出生の秘密を感じ取り、仏道に思いをひそめ、虚仮の現世を厭い離れようとする素懷を己れの身上としていたのだから、そうした求道の先達として宇治の地に隠棲する八の宮は究竟の先達であつたといえよう。しかしながら八の宮と交わるうちに大君と、世間の男女の仲らいとしてではなく反世俗の思いを共有する者同士の親交であらうとする意識を押し立てて

交わるうちに、そうした姿勢がいかに脆弱であるかを思い知らされることになる。八の宮が亡くなったのち、薫の恋の告白に接したときに、それまで薫を殊勝な求道者として受け入れていた大君は心を閉ざすことになる。大君は結婚という男女關係を取り結ぶことによって、それまで互いに相手の美点を敬い憧れるといううるわしい關係が必ずや破壊されるであろうことを恐れたのである。年立でいえば薫は二十四歳の中納言であるが、歴とした身分素性であり、彼に相應の北の方となりうる女性はやはり都の権門の姫君であろう。いかに皇孫であつても没落した宮家の、後見も不在の女性がどのように待遇されるのか、これは物語の世界を離れて一般論として考えてみても明白であるが、大君の薫を拒む態度にはいかにもと合点されるのである。八の宮の薫陶によって人となりを培い、宮家の矜りを守り生きようとする大君は、薫に思いを寄せているがゆえにこそ薫の意向に應えることができないのである。しかしながらそのような大君の姿勢は周囲の誰からも支持されない。宮家の女房たちにとっては大君が薫に縁づくことになれば現在の窮迫から脱出できるという思惑から、大君の頑なさには承服できないのである。いったい男女關係の成立において女性の側近の女房が大きな役割を演ずるということは、例えば源氏を藤壺に近づかせたのが王命婦であり、柏木を女三の宮の寢所に導いたのが小侍従という女房であつたことなどからも知られよう。女房を味方に付けることによって男は女に近づくことが容易である。大君にとつてもつとも警戒すべきは自家の女房たちであつたといえようが、しかしどこまで彼女たちに抗しきれるか、彼女は妹の

中の君を薫に縁づけて自身はその後見に徹しようと思ひ至る。しかし、そうした大君の意向を受け入れることのできない薫は、その気持ちを変えさせようとして、源氏にとっては孫に当たる匂宮を宇治に導き、中の君との仲を取持つことにした。匂宮という人は今上と今は中宮の地位にある明石の姫君との間に生まれた三の宮であり、東宮の地位の約束されている高貴びとであるから、中の君への情愛は格別でありながらもその身分からして宇治への通いの途絶えがちになるのはやむをえないことであつた。薫は二人の仲立ちをした責任上、匂宮の宇治通いの便をはかり、大君の気持ちが自分に向けられることを願望したのだが、そうした期待はまったく裏目に出ることになつたのである。これは第四十七帖総角巻の事件だが、薫は匂宮を紅葉狩という名目で宇治に案内し、そのついでに宮家を訪ねさせようと計画したところ、匂宮のもとには都から殿上人たちが大勢随行してことごとしい盛儀となり、身動きもならぬ宮にとつて忍びの中の君訪問など思いもよらぬ有様であつた。薫の思惑は大きくはずれたのである。大君・中の君にとつては対岸でにぎやかに宴遊してそのまま訪れもなく都に帰つていつた匂宮がただただ不実な男としか受け取れなかつたのは無理からぬことであつた。結局、窮迫した宮家の女はこうして見下げられ踏みつけにされるのかと思うほかない。匂宮と契り交わした仲の中の君はともかく、大君は蒙つた打撃ゆゑに病みつき、薫に看取られながら世を去ることになる。薫の目に一点も非の打ちどころなく清らかな美しい容姿を見せながら死んでいつた大君は永遠の理想的女人像として心のなかに生きつづけることになる

が、薫はこの大君の面影をすでに匂宮の妻となつている中の君のなかに求め、中の君はまた匂宮の京の邸に引き取られたものの宮が右大臣家に婿取られるという事態への嘆きから薫に依りすがるといつた経緯はありつつも、物語は薫と新しい登場人物である浮舟との關係、そしてやがて浮舟と薫・匂宮の三角關係へと進展することになる。

浮舟という女性、中の君が生まれた直後に死去した北の方の姫で宮家の上臈女房であつた中将の君の腹に生まれた八の宮の娘だが、宮は彼女を娘として認知しなかつたのである。八の宮から疎まれた中将の君はこの娘を連れ子として常陸介の後妻におさまつたが、莫大な資産を誇りつつも貴族的伝統的教養の欠如した介の家の野鄙な氣風を遮断して八の宮の血を受けた浮舟を別格に養育したのであつた。しかしなんといつても浮舟が常陸介の家族の一員であることは否定しえないとあつては、多数の求婚者のなかから故大將の子息の左近少將なら婿取りしても不面目ではない良縁と思ひ定めていたところ、その少將から、浮舟が介の美子でないことを理由に破談を申し入れられた。少將が媒人の提案に従つて浮舟の妹、常陸介の実の娘のほうに鞍替えするに及んで、怒りと屈辱に堪えられぬ中将の君は中の君を頼つて浮舟の身柄を委ねたのだが、その中の君の邸で浮舟は不運にも好色な匂宮の目にとまり言い寄られる羽目になる。難を逃れて身を隠した小家から薫に迎え取られて宇治に住まわせられることになるのだが、いつたい彼女の存在が読者の知るところとなるのは第四十九帖宿木巻において中の君の口から大君に容姿の酷似する異母妹のこと

が語り出されたときである。宇治の地に大君の「人形」をつくり、彼女を偲びながら勤行したいという薫に対して、御手洗川に流されてしまう「人形」では大君がかawaiiそうですと応ずる対訪を契機とするものであった。薫のいう「人形」は大君をかたどるにんぎょうであるのに対して、中の君は「人形」を祓や祈禱の際の、川に流すなどものの、「形代」の意にとりなして、それでは姉上がいたわしいと当意即妙にいなしたのであった。このような経緯で浮舟が大君の「人形」＝「形代」として登場してきたことは、そのこと自体にこの女性の運命が予告されているともいえよう。中の君のもとに身柄を委ねられた浮舟が匂宮に迫られたものの、やがて薫によって宇治に住まわせられるまでの前記したような経緯の語られる第五十帖東屋巻は源氏物語の世界全体のなかでもたいそう異色である。そうした世界のなかから登場してきた浮舟が、薫から異母姉の大君・中の君に対するのと同等に扱われるはずがないことに注意したい。彼女は所詮大君への思いを反芻するための「形代」として庇護されるにすぎないのである。そのような薫と浮舟との関係と対照的であるのが、次の浮舟巻に語られる匂宮と浮舟との関係である。自邸で言い寄ったものの素性も行方も不明の浮舟を忘れることができなかった匂宮が彼女の在処を探りつけて思いを遂げたのち、浮舟は古来の妻争い伝承の女主人公と同じく苦境に追いつめられることになった。匂宮の浮舟への傾倒はその身分地位の縄縛を敢然と振り切つて一個の男として全身的であり、浮舟もおのずから全身的な感溺をもって宮に応えているが、一方、薫はどこまでも亡き大君への思いを保持しつづけるための

「形代」として浮舟を庇護している。そのような薫を迎えるとき彼女はただ慚愧にさいなまれつつも、その心に、というよりは身体が匂宮を恋い求める。匂宮との刹那的燃焼には永続性の保証がない。それだけに薫との関係が破滅するかもしれないことを畏怖するほかないのである。ついに匂宮と浮舟の関係は薫の知るところとなり、日取りの示された双方からの迎え取りの通報に接した、浮舟は余儀なく入水の決意へと向かわせられることになる。

物語の最後の三帖、蜻蛉・手習・夢浮橋巻は宇治の世界から決別した浮舟の物語だが、ゆくりなくも横川僧都に救い取られ、やがて僧都の得度によって出家する浮舟の境地には誰しも追隨することができないのである。いかにも、薫のどこまでも思いやり深いやさしさは否定しがたかろうが、その身分地位にあさわしく今上の女二の宮を正室に迎えているような薫にとって浮舟の境位に下り立つことなどありえないのだといえよう。浮舟の生存を知らず、命を断つべく宇治川に身を投じたものとされる彼女の一周忌の法要が薫によって営まれようとしていることが小野の山里の浮舟の耳に聞こえてくるが、死者として俗世で追善される浮舟とは別人の浮舟が過往の人生と決別すべく仏に依りすがってここに生きている。やがて薫の耳に浮舟生存の情報がもたらされることになり、浮舟探索の動きが語られることになるが、そのとき薫と浮舟の心意の懸隔は際立つ。薫は浮舟を出家に導いた横川僧都にも働きかけ、自身も浮舟の弟を使者として浮舟のもとにさし向けるが、浮舟は肉親の弟を目前にして見ず知らずの者のように対応した。浮舟の心は肉親をも含めて現世の人間関係を拒絶しようとする

る。そうすることによってしか生きられない浮舟の在り様に対して、薫は自分が彼女を宇治の地に隠し住ませた経緯に照らして誰かほかの男がひそかにかくまっているのではないかとあれこれ気をまわしているという。薫と浮舟と、その心ごころの位相差はあまりにも歴然であり互いに流通することはもとより、たまたま交差することもありえなからう。八の宮の娘でありながら父に認知を拒まれ、常陸介の後妻となった母とともに貴族社会の外縁の草深い東国で成人した浮舟、薫にとっては母と亡き大君を偲ぶ「形代」ではあるけれど一人格ではありえなかった浮舟なればこそ物語の世界の人間関係に離別することができたのだといえよう。光源氏亡き後の子孫縁者の人生の語られる宇治の物語の世界はいかにも無明であり空気も稀薄といった印象である。まともに人間が向かいあい心を通わし、生きるいのちの歓びを謳歌するということのありえぬ世界といった印象である。もとより人間は、ことに男女は、互いに相手に求めあい頼りあい与えあうのが本能といふべきなのであるが、しかしこの世における愛とか信頼がどこまで人間存在の孤独、あるいは無常というものを克服できるのか。かえって相互に苦しみあうことになりはしないのだろうか。そのことを探りつめて結局は仏に救済を求めていくほかない女主人公を最後に登場させているのが第三部の宇治の物語であった。この第三部の物語は、しかしながら第一・二部の光源氏を主人公とする物語の展開として拓かれた世界であることを忘れるべきではなからう。薫にしろ匂宮にしろ、また大君や中の君、浮舟にしろ、その生きかたや運命は光源氏と彼をめぐる女性たちが抱えて

いた課題をさらに重く、深く継承しながらそれぞれ固有の人生を生きたのである。そのような宇治の世界は無数の高みであるといふべき光源氏の世界からわびしく下落していき、ついにそのさきは異世界である境界にまで到ったという印象だが、その経過を考察することによって光源氏の栄光と、そのなかに抱え込まれていた悲惨が逆にはつきりと見えてくるようである。

『源氏物語』の作者紫式部の実人生の修羅は『紫式部日記』によってその一端をうかがい知ることができる。寛弘五年秋から翌々年正月の間の記であるが、そこに読まれる式部の精神構造の在り様はけっしてこの期間だけのものではなく、彼女の生涯にわたるものであろう。紫式部は、藤原道長の権勢を後見として今を時めく中宮彰子に仕え、「うき世のなぐさめには、かかる御前をたづねまゐるべかりけれ」と、最高の栄華を誇る世界を讃嘆しつつも、たちまちにそうした己れの姿勢に異存を突き出す自意識の跳梁を制御することができない。寛弘五年という年には道長の栄華の末長く約束される慶事として中宮の第二皇子敦成親王が誕生しており、紫式部日記の記載によってその間の道長家の内情が克明に知られるが、主家の慶びをまのあたりに見、これを礼賛する紫式部の筆づかいには底知れぬ憂愁がにじんでいる。紫式部の女房紫式部としての人生は虚仮の姿といふべきであらう。本当の紫式部は現実の世界に坐ることのできる座席がなく、『源氏物語』という虚構の現実を紡ぐ作業において十全に生きたといふべきなのだろう。その作業が同時代においていかに人々を瞠目させるものであったかは、物語というものが、その語義からして誰彼の歴

とした著作ではありえず、従って、無数に作られ読まれた物語のうちとくに迎えられたために現存しているといつてよい『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』のような秀作でさえ作者名は伝えられていないのに、『源氏物語』が出現するや人々をして作者紫式部の才学への関心を誘い立てずにおかなかったことから察知されるというものであらう。しかし紫式部は己れの才学をひたすら隠蔽し、凡庸を装うことによつて『源氏物語』の世界を紡ぐもう一つの別人生を確保したというべきであらう。紫式部が紡いだこの虚構の現実の推移とともに歩んでみると、私たちは千年の昔にどうしてこのような大業がなされたのか、そしてこれを創出した王朝文化の成熟がどうしてありえたのかについていまさらながら思いを新たにせずにはいられないのである。

〔追記〕 この稿は平成八年十一月三十日、徳島大学 国語国文学会における講演の速記録にもとづいて書き下ろしたものです。